

地域の隣人

自分自身
(顔・名前)

自助グループ

親戚

友人

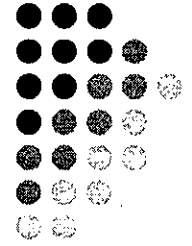
家族

NPO関係者

自然

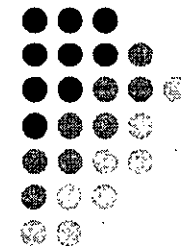
居場所はたくさんある方がよい。

居場所作りに関する提言



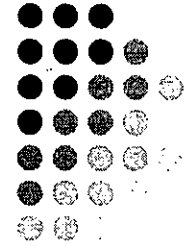
- 生活保護受給者に限らず、高齢者、子育て世帯等、誰にとっても「居場所」は必要。
- コミュニティサロン活動、自助グループへの助成が必要。
- 居場所作りの「効果」は長期的視点から検証する必要がある(医療費の軽減など)。

〈もやい〉と行政との関係



- 従来の行政の枠組では対応できない問題に対応
- 地域や福祉のカテゴリーを越えた活動
→どこが所管するのか。
- 行政はNPOの独自事業への補助金は出したがらない。
- 現在、運営は民間からの寄付金に依存。
→認定NPO法人の資格緩和、税制上の優遇措置の見直しを求めたい。

生活保護行政に対する提言 その1

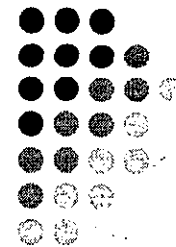


1、生活保護費の国庫負担の増加、ケースワーカーの増員は急務。

2、自殺予防策との連携、自殺予防の観点から見た自立支援の見直し。

- ・説教型就労指導によるうつの悪化。
- ・就労支援は労働市場の改善と同時並行で進めるべき。
- ・生活保護行政が自己責任論から脱却できるのかが問われている。

生活保護行政に対する提言 その2



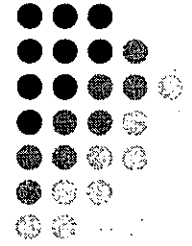
3、高齢者の社会的孤立を本気で防ぎたいなら、 老齢加算を復活すべき。

- ・保護費の減額は「引きこもり支援」に他ならない
- ・居場所への往復にも交通費がかかる。

4、NPOの活用を進めるのであれば、事業の 継続性の担保が不可欠。

- ・単年度では「居場所作り」の成果を立証できない。
- ・官製ワーキングプア、NPOワーキングプアは将来の困窮層を生み出す。

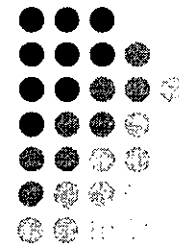
生活保護行政に対する提言 その3



5、第2のセーフティネットの整備により、 出入りしやすい生活保護制度に。

- ・保護の停止→2SNへの移行を可能にする(うまく行かなければ保護に戻る)。水際作戦の根絶による信頼回復が前提。
- ・2SNの支援メニューを増やし、多様な働き方を可能にする(起業支援、就農支援、アーティスト養成etc.)
- ・居住支援の拡充:住宅手当のような現金給付型だけでなく、民間賃貸住宅の空き家活用による社会住宅の整備(現物型)も必要。→低家賃の住宅が増えれば、生保から出やすくなる。

最後に～制度設計者に求められること



- 「全国市長会、知事会が生活保護法にしようとしていることを知って、『自立支援法』だけでもがんじがらめだから。いやだから。」(ある生活保護受給者の遺書より)

<もやい>の活動現場からの報告

稲葉 剛(NPO法人自立生活サポートセンター・もやい代表理事)

<http://www.moyai.net>

◎<もやい>の活動紹介

2001年、東京都内の野宿者支援活動に関わってきた数人で任意団体として設立。

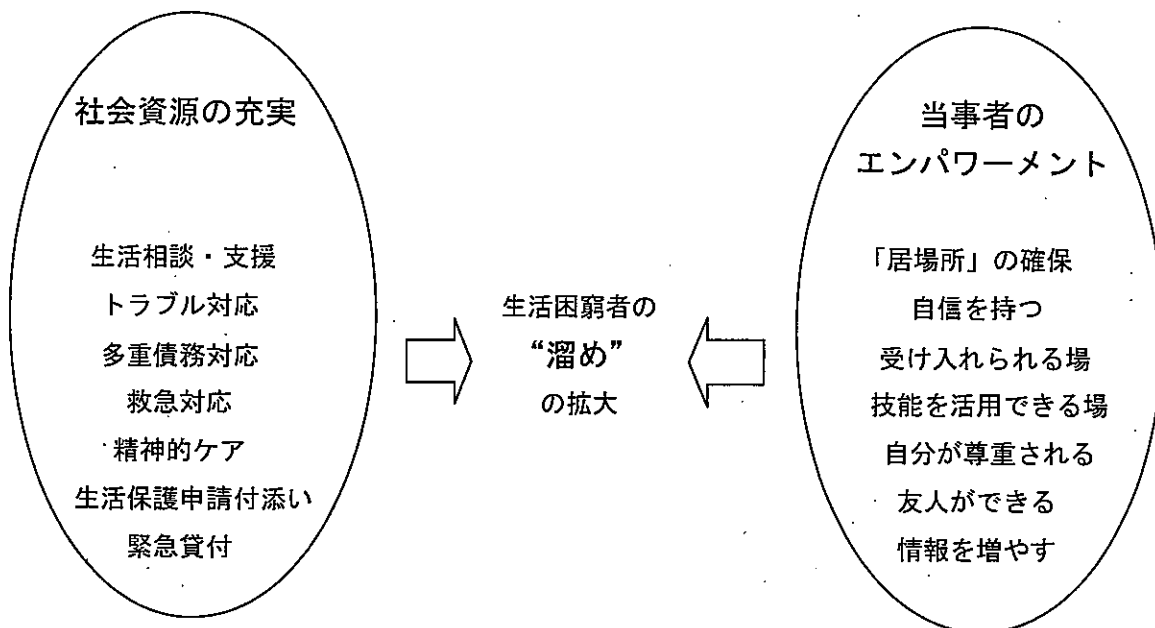
2003年、NPO法人化。2004年、飯田橋の一軒家「こもれび荘」に移転。

<コンセプト>

- ・従来の「福祉」の枠組みにはこだわらず、その人の状態に着目。
- ・「経済的な貧困」と「人間関係の貧困」の両方に立ち向かう。
- ・当事者と支援者の協働。

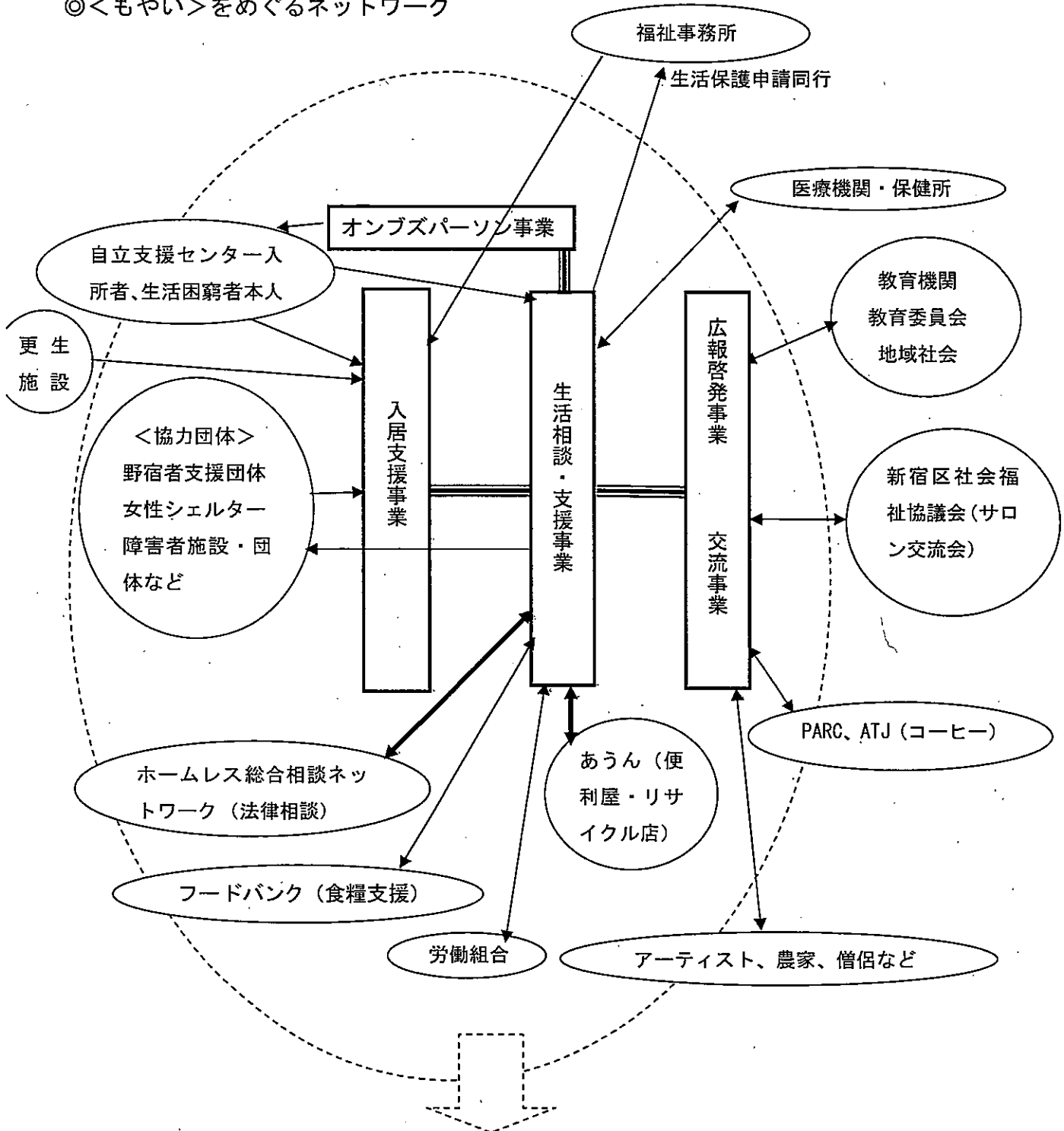
<事業内容>

- ・入居支援事業：路上・施設・病院など広い意味での「ホームレス状況」にある方々がアパート入居する際に連帯保証人を提供。累計で約1600世帯。
- ・生活相談・支援事業：入居後のよろず相談を受けていたが、最近は入居支援事業利用者以外の外部からの相談が増加。生活保護申請同行の件数が急増している。「福祉事務所で門前払いされた人々の駆け込み寺」。
- ・交流事業：入居後の社会的孤立を防ぐため、交流サロン(毎週土曜日)やレクリエーション企画などを開催。東ティモールのフェアトレードコーヒーの自家焙煎・販売にも取り組んでいる。
- ・他に緊急一時保護センターなどへの面会相談や、広報活動、学校や地域での人権啓発活動など。



*湯浅誠『反貧困—「すべり台社会」からの脱出』(岩波新書) P140 より

◎<もやい>をめぐるネットワーク



「反貧困」の社会的アピール、国への働きかけ

◎<もやい>の活動で大切にしていること

- ・自己完結型ではない、ネットワーク型の活動。「抱え込まない」、「突き放さない」支援のあり方
- ・「困った時にSOSを出せる」関係作り（当事者にも、外部にも）
- ・「いちげんさん」を断らない「開かれた場」。枠組みをあえて作らない。行政の支援は受けにくい反面、自由な発想を活かせる。
- ・「問題を『社会に返す』ためのネットワーク」と「当事者が本来持っている力を発揮できる場を作る」

◎出会った人々の言葉から

*Kさんの言葉

「毎日、朝起きるのがつらくて、寝たままテレビを見ていると、なんか外の世界と自分がつながっている感覚がなくなってくるんだよね。自分がエイリアンにでもなって、外から世界を眺めているような感じ」

*Oさんの言葉

「自分の部屋を失ったことによつて、それまでとっていた写真のアルバムや、中学時代からの住所録を全部なくしちゃったんですよね。それで何か、『守るものがなくなった』ような感覚になっちゃって、ふらふらしてしまったというか…。それからはどこに行っても落ちつかないんですよね」

「ほら、うさぎは淋しいと病気になるって言うでしょ。毎日誰とも話をせずにいると、そのせいで具合が悪くなっちゃったみたい」

*Hさんへの聞き取りより

「みんななりたくてホームレスになったんじゃないし、なりたくて生保受給者になったんじゃないし。みんなちゃんと仕事してきて、どっかでちょっとした拍子につまずいて、身動き取れなくなっちゃって。やりたくないんだけど、ホームレスになって。ホームレスなんてやりたくないと思うから、みんななんかにすがりついて、〈もやい〉さんにすがりついたりして、自立してきてるわけじゃん。(コーヒー焙煎をとおして)そういう人がもう一歩進めるような状態になれば、すっげーいいと思う。」

*Mさんへの聞き取りより

「私ね、その話(〈もやい〉で合同墓を作るという話)いいなって思ってたんです。もしね、そういうのあれだったらやらせてください。入れてもいただきたいし。そんなとき、すごくいいなって思ってた。そうするとかえって気楽じゃないですか。私は人間の魂って、死んでからもあると思ってますんで、お墓の中に入れてからもみんなとしゃべったりして。我々も安心感になるっていうか。身内、血を分けた人ってそれぞれあると思うんですよ。でも長いこと帰ってないから、帰りにくいとかいろいろあると思うんですよ。みんなと一緒に楽しくいられるんだったら、いいなっていう考えなんですよ。」

(注) 〈もやい〉は他団体とともに僧侶や葬儀業者の協力を得て、2008年、都内の寺院に合同墓「結の墓」を建立した。Mさんも今はそこに眠っている。

◎参考文献一覧

『貧困襲来』 湯浅誠 山吹書店・JRC

『反貧困―「すべり台社会」からの脱出』 湯浅誠 岩波新書

『どんとこい、貧困』(よりみちパン!セ) 湯浅誠 理論社

『若者と貧困』 富樫匡孝ほか編著 明石書店

『ハウジングプア―「住まいの貧困」と向きあう』 稲葉剛 山吹書店・JRC

『つながりゆると～小さな居場所「サロン・ド・カフェこもれび」の挑戦』 うてつあきこ 自然食通信社

『生活保護自立支援プログラムの活用 ①策定と援助』 布川日佐史編著 山吹書店・績文堂出版

『生活保護の論点～最低基準・稼働能力・自立支援プログラム』 布川日佐史 山吹書店・JRC